



のびのび いきいき 生涯学習

『わたしの生涯学習』

【ボランティアの喜び】

福寿会 高橋 妙子

私どもは、「お茶と着付け」を通して多くの人々への奉仕を目指しております。「福寿会」という名は十年前のことぶき勸学院の同窓生がつけてくださいました。楽しかった学院の名を使わせてもらい、ことぶきは「よろこび」福寿は「しあわせ」にも通じると、それこそ喜び合ったものです。

このように、福寿会が生まれてから十年、小さな力ですが折りあるごとくに、自分たちの出来ることで地域の人々や、外国の方々との交流に少しでもお役に立つよう努めさせて頂いております。この活動を通して自分一人では何もできなくても、同じ志の人々が集まれば非常に大きな場を展開していくことができるということを確信致しました。

今までに、都留文科大学の留学生を始め、多くの外国の人々、他県からイベントのため都留市に集まってこられた方など、何回となく「茶の湯」でおもてなしを致しました。外国の人には着物を着せてさし上げました。その都度、尋常ではない喜び方をなさるのを見ると、それまでのいろいろな苦労が吹き飛び、それこそ、このボランティア活動が自分たちの「よろこび」であり、「しあわせ」であることを痛感致します。そして、ボランティアということは、人のためにしているのではなく、とりもなおさず自分たちの成長、勉強のためにさせていただいているということ、いやというほど感じているのです。

茶の湯というと、大変に堅苦しいものと思っている方も多いと思いますが、利休さんも言っているように、「ただ湯を沸かし茶を立てて、飲むばかりなる事と知るべし」と、いうことなのです。この一碗の茶から世界の人々との対話が始まります。すばらしいことではありませんか。別に外国語は必要ありません。心と心でわかりあえます。

学習した成果が、地域に生かせ何らかの形で社会活動へ参加できるということは、本当に有り難いことと心から思っております。この輪の拡がりを願ってやみません。



「茶の湯」でおもてなしの様子

【花々のおしごと】

小俣 典子

美しい花や草を見ますと心なごむ思いがいたします。活け花をはじめて四十数年、夫や子どもよりも長い付き合いになりました。季節の花を活けることで、自然のすばらしさ、美しさを知ることができました。花を活けるといふ習慣は、人間の純真な感情から自然に行われたものと思います。喜びの席に必ずきれいな花があります。悲しい時もやはり花をさします。それだけ花は喜びと共にあり、また、悲しい心の慰めとなってくれると思います。

活け花はだれでもが持っている花を愛する気持ちから始まったものではないでしょうか。

十九年前になりますが、市の方よりお話がありまして「鷹の巣活け花教室」を始めることになりました。最初はお互いに緊張しましたが、回を重ねるにしたがって次第に緊張もほぐれてきました。最初は、鉢を持つのも始めてという方も「お花を活けていると気持ち落ち着き活ける楽しみもわいてきました」と、話してくださいいます。「玄関にお花がないとさみしいです」と、一生懸命活けていらつしやる姿を見て、活け花を続けて良かったと思えました。「今日のお花はピンクできれいですね」「もう春のスイートピーです」夏のひまわり、山中湖「花の都公園」の一面のひまわり畑を思い出して話が盛り上がりです。秋の菊の花、冬の花、正月の花、松、梅、千両、教室の中で四季の変化と美しい自然を身近に感じ取ることができ、本当にすばらしい事と思います。

また、五、六年前より、新井婦人学級の皆さんと年一回(十二月)新井自治会館で正月花を活けております。楽しく話し合いながら、鉢を動かして「長いかしら」、「短かったね」と、きれいに活け上げて「これで正月大丈夫」とそっと家に持ち帰ります。楽しい学習です。その他に、都留華道連盟会員として、文化祭へも出瓶させて頂いております。私は、お花を通して多くの方々と出会うことができました。すばらしい出会いです。活け花は、型があり難しいように思うかもしれませんが、だれもが手がけることができ、自然とのふれ合いが、心のやすらぎをもたらすことと思えます。これからも活け花を一生の友として、学んでいきたいと思えます。



「活け花教室」の様子